
さんすうリズム

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さんすうリズム

【Nコード】

N9816E

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【SF / 数字 / 哲学 / 全10話】 天才ゆえに理解してもらえず苛立ちながら過ごしてきた幼少。年月をかけて得たものは弟子。諦め忘れかけていた時間が今、再び動きだす 『空想科学祭』 企画参加作品。

000 「フィギュア・サークル」(前書き)

SF小説企画『空想科学祭』の参加作品です。

サイトはコチラ

<http://sffesta2008.soragoton.net/>

宣伝用ブログはコチラ(漫画版あります)

<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-109.html>

この物語は、フィクションです。

000 「フィギュア・サークル」

時は未来。

そして何処かにある、根源が数字の場所。

物は全てプログラムで出来ており、

一度バグると元には戻れない。

バグる事など許されない世界。

一人の天才は、バグ化からの再生を 夢 見ていた。

されど、

彼を理解できる者は いなかった。

神よ、願わくは ただ ひとりでも。

彼を理解できる者の存在を認めてほしい。

ただ ひとりでいい。ひとりでも。

ひとりでも。

未来に光さす者の存在を与えたまえ。

……

テスト生、加藤あずさ。

灰茶のツナギに さすまたに似た棒状の武器を持ち。もう片手に

は試験に重要な『探索爆弾（サーチ・ボム）』を3個ほど、各指と指に挟んで持っていた。

『探索爆弾』とはスーパースポールのようで弾力性が あり、その球の表面には大きく“サーチ”を表す“S”が書かれている。
安価で、色も豊富で ある。

『試験番号 P 1029。加藤あずさ。テスト開始』

抑揚のない機械の声のアナウンスが場内の天井、隅の箇所箇所に取りつけられた拡声器から響く。始まりを知らせる。

あずさは張り切って武器を振り上げた。「行きます！」
目の前の『敵』と対峙する。

ギシャアアアアッ！

怪獣で ある。2階建ての建造物くらいは ある全長の。

黄土色の皮膚に覆われブヨブヨとして垂れ下がる肉は、動きをより鈍らせる。どう見ても小さい あずさの方が若さも あつて俊敏だった。

直立2足歩行をしながら あずさに迫る。水晶玉のように透明で大きい両目は あずさを睨み見下し、ヨダレの こぼれて落ちるしまりのない裂けそうなほどの大口からは呻きの声が生臭い息と共に吐かれていた。

ドタドタと。土ボコリを散らしながら懸命に駆けて来る。

ちよつと同情心が沸いた あずさ だった。

「でも、ダメ！ だもん、ね！ ギドンちゃん」

敵を勝手にギドンと名づけながら、あずさは頭の中で。蓄積された“教え”の言葉を順番に呼び起こしていった。

まずは急所を探す『探索爆弾』だ、あずさ。

あずさは、一個ずつ指と指に挟まれていた3個の『探索爆弾』を

敵の足元めがけて放り込んだ。ボンツ、ボボン！

ギドンは ひるみ直進を止め、クラクラと めまいに翻弄された。白い煙が砂ボコリに混じってギドンを囲み襲いかかる。だがダメーシは ない。与えない。何故ならば。

この爆弾は。

「みーっけ！」

はしやぎ飛び跳ねる あずさ。

ギドンの出っ腹の下部に大きく“1”という数字を見つける。『探索爆弾』は、突如 浮き出た この数字を出すための物なのである。

敵の身体の何処かに『数字』が出てくる。

そこに出てきた『数字回数分』、『攻撃』しろ。

「はあい先生！」

元気よく記憶の中の声に返事をした後、あずさは武器の棒を思い切り振り上げ体を後ろに反らせた。「せえの」

そこが、奴の。

勢いよくギドンの『数字』の書かれた箇所へと放り投げられ、グサリと突き刺された。「ピギヤアア！」

断末魔の悲鳴を上げて、怪獣は……ちゅどーん！ という笑いのような暴音と共に爆発し炎上した。モウモウと、白い煙ではなく今度は黒い煙が立つ。

中で煙が こもらないよう室内業務用の大型空気清浄機はフル活動し、ドーム状と なっていた天井からはスプリンクラーが自動で発動、爆発地点へと集中豪雨を浴びせている。無論、あずさは お先にと。陽気に口笛を吹きながら早くも現場から退散していた。

“教え”の声の最後ひと言は、あずさには もつ必要ないようだった。

そこが奴の、『弱点』だ……

「まだまだ甘いな」

試験用にと設けられた屋内の大地。土砂の山やジャングルを真似た常緑樹林で敷地を造られる。

そこでの あずさの試験概要を、2階 外壁の窓越しに見物していた一人の男。水島竜代、まだ若い。

彼は長く繊細そうな毛質の髪を一つに まとめて、白衣を着た背中の上に垂れ流していた。

『テスト終了 テスト終了……』

後始末に忙しい機械達の作動音が やかましく。テスト終了を告げる明るいポップ音楽が流れるも、演出 効果は皆無に等しかった。

……

地球とは違う星という意味での別世界、『フィギュア・サークル』。

『数』『数字』『情報』を根本とした世界。万物は、数と数字で出来ている。

形成されるに必要なのはプログラム。しかし算譜を奏でた神の正体は未だ明かされては いないという。

バグると『野獣化』する。

「敵の急所ナンバーを探して、そのナンバー回分、出てきた所に……」

…」

と、おさらい しながら。あずさは服を制服に着替えて、試験現場を囲んでいる2階外壁と窓を越えた廊下へとスキップしていた。

ご機嫌な あずさの向かう先には、竜代が待っていてくれた。

師と弟子。

竜代と あずさ。

本日は あずさが一人前に なるかどうかの試験の日で ある。

「攻撃！ ……でしょ！？ 先生〜！」

と、太陽のような眩しい笑顔で手を振りながら、竜代に おさらいの確認を求めてみた。顔全体に、『楽勝！』という文字が浮かぶ。

「油断しすぎだ」

ゴン。

「ああ〜」

……あずさは竜代の鉄拳を頭上から食らった。「あたた……」

頭を抱えていると、竜代は冷ややかに説教をした。

「あれじゃやられる。試験用の野獣だから よかったものの」

「ふえ〜ん……先生……」

人が数人、廊下を歩き2人の横を通りすぎて行つた。白衣、作業着、制服を着た生徒。あずさは竜代に殴られ、「痛い〜」とまだ唸っている。

「ま、基礎はOKだけだな」

さりげなくフオローをしていた。「……！」

あずさは顔を赤らめた。基礎はOKと言った瞬間の竜代の顔の、微笑みパンチが特攻的に効いたらしい。

（あひゃあ〜……）

そう、まんざらでもない。師弟関係だけかと思いきやだった。ただ、竜代の方は どのようなかは不明だが。

ピンポロンパランポロン……

電子音の後、2人のいる第5棟構内に人の声でアナウンスが響き渡る。

『テスト生 加藤あずさ。テスト生 加藤あずさ。担当員 水島竜代。担当員 水島竜代』

2人は同時に上を見上げた。「ん？」

『至急 管理 局長室まで来て下さい。繰り返します。至急……』
「俺まで呼び出しか……行くぞ、あずさ」

竜代は聞くと、すぐカーブを描く廊下を歩き始めた。「先……」

あずさは、竜代に呼びかけるよう……止めて俯く。「……」
竜代のあとを追った。

（先生は、頭が よくて…… もっと出世 出来るはずなのに）

あずさの胸の内を締めつけていた。

（テスト生の教育係なんて下っ端の仕事してる……）

歯がゆさが、あずさの胸中を支配している。

呼び出された管理局長室にて。

ホログラフィック式のドアの前に立った2人は依然、黙ったままだった。

「水島竜代、加藤あずさです。失礼します」

「入りましたまえ」という声がか中で聞こえた後、ひと間を置いて、竜代が先にと光カーテンのドアを通り抜ける。あずさも後ろからついて行った。

宮殿並みに大広い室内の天井には富裕や上層階級の象徴となるべく光散乱性が高い反射性ガラスをふんだんに用いたシャンデリア。照明の役割は、あまり果たしては、おらず、装飾の面で備えつけられたものにしかすぎない。室内は暗かった。

足を踏み入れたばかりの頃は数人の黒影にしか見えなかったものも、次第に目が真正面の窓からの逆光に慣れてくると人物をそれぞれ目視で確認できた。

まるでシアターにでも訪れたのかと思われる臨場感で、あずさ達は迎えられた。

壁が窓で一面と なっている前に、あずさ達を囲もつかとしている、横に連なった磨きかかった黒の上質な机。左右の端と端には、ホログラムなのかどうか見ては わからないが背の高い観葉植物の暗い緑が生い茂っていた。

机の真ん中……机自体は部屋の やや窓寄りの中央に位置するが、これまた上質で鉄に木柄の上塗りを固めたとも見える素材組みの背の大きなイスには、一人の貫禄づいたスーツを着ている年老いの男が座っていた。

年の頃は50代前後だろうか。顔や首、机に つかれた両肘の先の組まれて見える手の甲や各指には、年季の入った幾重にも なる皺の皮膚で覆われている。

コーティングされたような硬い整髪で、俯き加減に あずさ達を上目づかいで見る。

決して睨んでいるわけではないが、厳かだった。ひと突きで脆く砕け散るガラスの空気だった。

この男が局長である。管理局を執りしきっていた。

「足労だった、水島」

局長はピクリとも動かず。事務的に声をかけた。

あずさは、緊張で背筋が強張る。ゴックン、と気を最大限に遣いながらも唾を喉の奥へと飲み込んだ。

（ホンモノの局長だア……）

感動は隠れてしまっている。局長クラスの大物に直面した機会など これまで なかった。金縛りにあっているに近い状態。身動き不可能な切迫感で身を縛られていた。

(すごく男臭い部屋だなア……)

緊張の呪縛から逃げようと、頭脳回路は脱線を試みている。

「合格おめでとう」

「へ？」

まづかった。僅かに脱線していた あずさは、虚を突かれた。

「先ほどの試験 結果だ加藤君。君は今から晴れて一人前の算術師として働く、許可と資格を得たのだよ」

それを聞いた あずさは心臓が飛び上がりそうになりながら「はっ、はい！」と慌てて返事をした。背筋も同時に さらに真っ直ぐに張る。

「まあ、……」

局長に変化が あった。口元が微かに動く。

目を伏せ、ふ、と小さく息を吐いた。

「当分、彼の元で修行する事に なるのだがね」

そんな事を告げながら。

「……」

指された竜代は立ったまま無言だった。

あずさの脳裏に次の単語の数々が思い浮かばれる。

階級、社会、組織、上層、官僚、貴族、エリート、学歴、身分の差、天下り、大御所、権力、金持ち、ごちそう……

下層から、一般局員、支部局長、総部長、局長……と上層に向かって階級が並ぶピラミッドが想像の中で出来上がっていた。

「早速だが」

局長はガタと立ち上がり。少し離れた壁際に待機していた、部下である若い黒スーツマンに向かって、パチンと軽い音を立てて指を鳴らした。

若い部下の男は即座に反応しカード型のリモコンをスーツの内ポケットから取り出して、親指ひとつで操作した。

ピ。操作の対象それは局長の背後に ある、ほぼ全面の窓ガラスへと。

結果 映り出されたのは、何処かの地形。円線と緯線と経線が交錯している、あずさ達に とっては未知の場所だった。

ひと際 目立つ赤い点が ひとつ中央付近にポツリと。局長の指す指は、それに注目せよと指していた。

「初任務だ2人とともに。『地球』へ行ってもらう」

僅かに傾いていた眼鏡を直しながら、局長は そのレンズの奥にある小さな目を……鋭く あずさ達に光らせていた。

初任務だあ

！？

地球にて。

制服姿のあずさ。白いブラウスの襟を出し卵色の手編み風セーターを着て、茜地チェック柄のリボンを胸元に着けている。同じチェック柄のスカート、黒のハイソックスを履いて半端に伸びていたストレートの髪は後ろできちんとひとつに束ねていた。

軽量 小型パソコンの入った指定カバンを肩から さげて持っている。

私立チユートリアル学院 中等部 施設前の昇降口で、あずさはキョロキョロと目を運ばせ登校してくる生徒を眺めていた。

しかし結構な時間が過ぎていくにつれ。ついに ため息をついてしまう。

「先生まだかなー。何処に いるんだろう……」

待ち合わせているわけでは なかったが、同じ地、同じ日に来る事には なっていたはずで。あずさは竜代が通りがからないかと期待して待ち伏せていたのだった。

後ろを振り返り、ビル並に高く そびえたっている校舎を見上げた。奥に ある体育館と思わしき建造物の屋根のソーラーパネルは、空で さんさんと輝き放射している太陽光エネルギーを電力に変えて思う存分に これでもかと機能して働いている。

体育館の周辺には、車椅子に座った お年寄りや小等部の生徒達が集まって騒いでいた。これから何かしらの競技でも屋内で するのだろうか。車椅子に乗った人の手には、厚さは薄いが一見スマートフォンにも見える物を持っていた。

見える物、とは言ったが。実際には そうだった。それ ひとつで通信や意思表示が できる。ただ、扱う者が高齢者や障害者などの場合は機能の面で第2、もしくは3者の手に よって使用 範囲が制限される事と なっていた。

学院内は完全アクセスビリティ（バリアフリー）化をめざすと校訓の ひとつとして掲げられている。

あずさが校章の上掲された壁を見ると、ちょうど予鈴が鳴ってしまった。有名作曲家が作曲した覚えやすいメロディが響いて始まりを知らせている。

チンチロリン。……

「もう先に来てるのかも……」

あずさは待つのを諦めて、昇降口の中へと消えていった。……

1年A組の教室では、数学の授業が行われている。

「この場合。 - 1 + x に対して y 軸方向に」

と、教壇に立った竜代の授業が行われていた。

新任の挨拶は簡単に済まし、黒板ではなく電子ボードの前で生徒に関数を教えていた。横長のデスクは その形を緩やかに弧を描いて階段上に幾重にも並び、生徒は連なって各イスに座り教師の授業を受けている。教壇に立つ者の話は充分に聞き取れるよう配慮がなされていた。

そして生徒は入学時に支給された小型で軽く薄いノートパソコンを開き、キーボードで字を打ったりペンタッチで直に書きノートをとったり、隠れて好みの絵を描いたりと自由に使えるようになっている。

インターネットでアニメや自分の家の隣近所の様子などが見放題だが、残念ながら授業時間の間は禁止され回線は強制的に遮断されている。

視力や聴力の弱い生徒にも負担が かからずに済むように、パソコンでボードの字を見たり繋げた補聴器 越しで教師の声を聴いたりと。

顔を、ボードや教壇に向ける必要性は特に ないのだが。

(……)

竜代は、ふと気が つく。

自分に向けられている女生徒達の熱い視線に。

比較的、女生徒の方が人数の割合が多かった。そして。

瞳にハートマークを作り、竜代の端整な顔を見ているだけなのか好き勝手に妄想と暴走しているのか、心の中から王子様とも呼びかけているのかは わからないような顔で授業を受けていた。

竜代は頭をポリポリと……掻く。

(何だか やりにくいなあ……)

明日から仮面でも被ろうか、と あまり笑えない冗談を思いついていた。

そんな竜代の思いとは裏腹に。

女生徒達の それぞれは単純に喜びあつて噂していた。

(「新任の先生、当たり！ これから数学 好きに なれそー」)

(「めっちゃイケ顔じゃーん」)

と、机上に開けているノートパソコンに隠れて前後と左右の席同士で囁きあう。

そして それらはバツチリと。タッチペンを持つ手を小刻みに震わせている あずさの耳にも届いていた。

ぷうつ。

両ほっぺたは、風船のように膨らんでいる。

怒ってい……た。

(先生が教師で勉強を教えてくれる……それは いいんだけどッ)

完全なる嫉妬。こめかみ あたりがピクピクと動いている。

グググ……。

ペンを握り潰すくらいに強く突きたてて持っていた。

（先生は絶対に…… わ、た、さ、な、いッ！）

一度 燃えたぎった火は消せそうに なかった。

「次の問1。加藤あずさ」

続けて授業を進行していた竜代は、あずさを当てた。

劫火の勢いで あずさは答える。

「x＝1です！」

イスから乱暴に立ち上がってコブシを握っていた。

「x＝2だ」

竜代の冷ややかな返しが あずさへと。

授業は問題なく普通に終わっていった。

（答え間違っちゃった……）

先ほどの授業が終わり、休憩時間。あずさは机に突っ伏して答え間違いを悔やんでいた。きつと後で竜代に こっ 酷く叱られるのは、と思いながら。

落ち込んでいる あずさに、クラスメイトの女子が3人やって来て声をかけた。「加藤さん！」

頭を上げて声の した後ろを振り返ると、「おーい、転校生！」

と。小さな小花の装飾されたピンどめを着け肩まで伸びた髪が可愛らしく外ハネに なっている女子が白い歯を覗かせていた。

隣には、肌が色黒だが大人っぽく見せようとストレートのロン毛を垂らしている女子。

さらに その隣には、ショートヘアで目立ちそうに なく地味で小柄な女子が いた。

3人は3人で盛り上がっていたようで、まだ転校してきたばかりの あずさに気軽に呼びかけに来てくれたのだった。

「次、理科室だよ。一緒に行こ！」

高めのテンションに あずさは驚いて目を丸くしてしまう。

あずさが戸惑ったのには、違う理由も あった。「どうしたの？」
不思議に思った内の ひとりが聞いてきた。

「う、ううん！ 何でもない」

慌てて次の授業の用意をし始めたのだった。

違う理由。そう。

あずさは、こういつた『集団生活』というものに不慣れだった。
と同時に、学校で友達同士で笑いあった事などない……。

地球に来て、地球の学校に来て、地球の友達と時を過ごす。

全てに おいて あずさにとっては新鮮な事だった。初めてだった。

感激に、しばらく酔いしれる。

（忘れてた！ 私、今日から『地球人・中学一年生』だったっけ！）
あずさはパソコンを持って彼女らと合流し。談笑しながら教室を
出て行った。

理科室までは外庭に繋がっている渡り廊下を通らなければ なら
ない。行き交う生徒達とも すれ違いながら、あずさ達は2人ずつ
並んで歩いていた。

「ね、ねえ。最近さ、変わった事って なかったかな？」

緊張から だいぶ打ち解けてきた あずさは。いい調子のまま、
聞きたかった事を聞いてみる事に した。女子達は お互いの顔を
見合わせている。

そして3人とも あずさを指さしてみたりした。

「いえ。私の事では なくてですね……」

おいおい、と あずさは心の中でツツコミを入れる。本日 転校
生として参った あずさは その対象になると言っているのだらう。
「だあーって、こんな半端な時期に転校生と！ 新任の先生が来る

だなんてさ。珍しい事でしょ？」

ピンどめの女子が言った。もつともで ある。

「そ、それは そうなんだけど。もつと別の事で何か ないかなと……」

あずさは身を引く思いで謙虚に なった。何か手がかりは ないかと……期待しながら。

「別の事お……？」

「えー、何だろう」

疑問が飛ぶ。渡り廊下は通りすぎ、上の階へと行くためにエレベーターの呼び出しボタンを押した。隣に螺旋状に上へと続く広めの階段もあるが、大概の生徒は楽をしたがって使わない。たまに授業中に、節足動物をモデルとして造られた円形の虫型お掃除ロボが床の上を這いずりまわって床を磨いているさまが見受けられる。

「そついえばコイツ、先月 先輩に告つて振られたんだつてよー」

「言つう！？ それ今ここで！」

と、話は脱線しそうな気配だった。すると次の授業を知らせる予鈴の電子音メロディが流れた。

リンリンリン。ポリプロピレン。

エレベーターの開閉ドアは開き、あずさ達は乗り込んだ。

上の階へと動き出す箱の中で、あずさは軽く息をつく。

（手がかりなし、か）

本当は舌打ちしたいくらいだったが、諦めて壁に身をもたれさせて落ちつけた。

（まあ いいや。後で先生に……）

目を伏せていると。

地味だったショートヘアの女子が いつの間にか あずさの隣に来ており、耳元で囁いた。

「出るのよね……」

真顔で、坦々と言葉だけを吐くように呟いた。

あずさは黙ったまま。女子の言い出した事に耳を傾ける。2人の前にいるもう2人の女子は女子で、何やら巷で人気の田舎カフェやスローフードの話などで盛り上がりつつ騒ぎ。こちらの会話は耳には入っていないようだった。

「私、放送部なんだけど……」

聞いていなくても構わず。ショートの女子はあずさの方ではなく自分の前を見ながら言う。

「先輩達が言ってたの。放送室、美術室、音楽室、理科室、保健室……校内中を、『化け物』が徘徊してるって」

何処か暗い表情の彼女が言い終わると、エレベータは4階に辿り着きチンと甲高い音をたてた。

開いたドアからあずさ達は出る。あずさは傍目にはわからないが、心中では敏感に反応していた。

（あるじゃん！ そーいう噂！）

ただの噂だったが、手応えを感じて手を固く握り締めていた。

超高層マンションの34階。窓から見える東都スカイツリーの期間限定ライトアップはひと際目立ち、都会一帯での甲夜の主役となっている。

脇役となった周囲のビル街光を目下に見下ろして、竜代は淹れたばかりで熱いマグカップに口をつけながらあずさの話を聞いていた。

あずさが話し終わった後。竜代は特に驚きもなく香り立つコーヒーをゆっくりと味わい飲む。

「人間だつて鈍感じゃないさ。噂くらい別にあつたつてそれが普通だろう」

竜代の立ち姿が映っている光機能性セラミックス薄膜窓ガラス。太陽光を浴びるだけで掃除の手間のかからないその曇りのな

いガラスには、竜代の後ろで背もたれを抱えるように反対に座っている私服の あずさの姿も映っていた。

「うん……そうだね」

たいして手がかりの掴めなかった事に がっかりしていた。『化け物』が出ると聞いて興奮していたテンションは竜代の返答で冷めきってしまっていた。

「任務内容の確認だ言ってみろ。思い出せ」

元気の ない あずさに、竜代は問う。あずさは竜代に見つめられ一瞬たじろいだが、すぐに気を取り直して。

自分達が いたフィギュア・サークルで局長の言っていた、『任務 内容』を思い出し答えていった 。

管理局長室で。

局長は竜代と あずさの2人を前にし、スクリーンと なった窓の面に表されたポイントを捉えながら説明していった。2人は一字一句 逃さない聞き流さないよう真剣に耳に入れる。

局長は言っていた。

「ここに野獣化 生物の反応ポイントが ある。君ら2名の任務はこの 地球という星の住人として潜り込み、野獣を見つけ出して直ちに抹殺し。報告する事だ 」

……

局長の言葉を思い出した あずさは、ポツリと言った。
「バグ化した野獣を……見つけ次第 退治する事……」

「そうだ」

竜代は さも当然のような頷きしか返さず、デスクの上の書類の中から一冊の黒表紙ファイルを手に取り。パラパラと挟まれていた紙をめくっていった。

「反応ポイントは、あの中等部 校舎。それは わかってる。後は何処に いるのか。もしくは……『何が』バグ化したか、なんだ」
竜代の説明を真剣に聞いていた。

「知能を持っていると厄介だな。昼間は姿を変えているのかもしれない」

「……」

まだ、何にも身元が わかっていない見えない『敵』……野獣。

あずさ達の住む所『フィギュア・サークル』から もたらされたもの。いつから そうなってしまったのかは わからない。何がきっかけで そうなってしまったのか。宇宙各地で、バグ化してしまった奴らは確認されるようになった。

幸いバグ化生物 特有に持つ信号というものが あり、その発見は すでに遂げているフィギュア・サークルの住民は最大限に それを利用して、こうして あずさ達のような者達を現場へと派遣する。

あずさ達は地球人ではない。人間とも違う。構造が違う。仕組みが違う。根本が違う。

『数』『数字』『情報』となりプログラミングされ、それ特有のセンソラル プロセッシング ユニットを経て具体化され形を成す。具体化されなかったもの。または歪み具体化されたもの。それが。その不幸な者達が。

野獣。

あずさ達の与えられた任務とは。反応が確認されたポイントの野獣を発見 次第、始末する事だった。

こうした任務は竜代に とっても あずさ達に とっても。初め

てと なる。

（知能…… だったら初任務で厄介な仕事だなあ……）
あずさの心中に嫌な吐息が広がった。

それは、竜代の『過去』に大きく関わっている。

現在 提唱されているバグ化生物 誕生の説は、幾つかある。俗説にしかすぎないが、紹介しよう。神のような子どもの話。

少年タイシの住んでいる家は貧乏だった。

お金がない。だけど親と弟妹が いた。

いつか災害が起きたら隣近所よりも真っ先に崩壊してしまいそうな屋根の傾いた家に住んでいた。何とか今は持ちこたえている。

タイシはまだ子どもだった。小さい弟や妹がいるけれど、まだまだ自分一人でも遊びたい。そんな年頃を抱えていた。

ある日タイシは親に おもちゃ屋へ連れて行ってもらう。

ラジコン、飛行機、ミニカー、カード、人形、プラモ、テレビゲーム。それらには全くとっていいほど興味を示さなかった。

しかしたった一つだけ。タイシの心を揺り動かした物がある。あまり目立たない隅のカウンターで、照明の光も届き当たらず影でひっそりと隠されているように陳列されていた、その物よ。

それは。

回転キューブ。ルービックと、建築学者の名を付けられている。

一般的に浮かぶものと。立方体が3×3個 集まって合計9個で一面を成し、それが各面に同じ色を向けて揃い、立方体と成る。

各列、行で縦と横に回転させる事ができ、一度ぐちゃぐちゃに回転させておいたものを今度は色を揃え戻そうと思案していく。そんな思考遊びであるのだ。

実際に試してみるとわかる事だが、ただ回転させていくだけではなかなか色を揃えられそうにはないと思われる。

コツがいる。そしてパターンを覚えればいいのだと、キュービストは言った。

試してみるといい。

タイシの好奇心は、それ一点に向いていた。しかしまだ新発売されて間もないそれは、おもちゃとしてはとても値段が高く。貧乏な身分と知っていたタイシは欲しいと親に言い出す事ができなかった。子ども心に親達を氣遣っている。長男で、下の弟や妹の事も考える。仕方ないと言えよう。

いったんは退却したタイシだったが、決して諦めてはいなかった。何と、タイシは自分の手で回転キューブを作る。

材料は紙だ。安く手に入る厚紙だ。壊れやすいし水にも弱いが形になった。ちゃんと回転し、おもちゃとして充分に遊べた。見事である。

ただ、前述に述べた普通の色並べのキューブではなかった。各面に色を塗るのではなく、タイシは何と数字をかいたのだ。

色ではなく、数字を並べ戻すキューブ。1 2 3 4 5 6 7 8 9、1 2 3 4 5 6 7 8 9、……1 2 3 4 5 6 7 8 9。一面に9つの数字を順にかいていた。そしてその同じ面が立方体の6面に。

かき回した後は、元に戻す。

それだけの楽しみ。

タイシは、彼は遊ぶのだ。紙なら幾つでも作れるし、人に贈るわけでもない。

彼はお金をかけずに時間という手間をかけて欲しいものを手に入れた。

欲しいものとは、形。

神なら、宇宙か。

忘れないでほしい。タイシは子どもだったのだ。

コツをつかめず慣れないうちは、揃えられるわけがない。

揃えられなければどうするのか。答えは単純だ。元に戻らなければ

ば。

ポイだ。 放棄する。

そうやって『生まれ』たものが。

……『野獣』である。

333 「天才少年は」

こんな論文、世間には発表せん！

私に恥をかかすつもりか！ 水島！

かつて竜代はフィギュア・サークルでも有権に値する大学で勉強と研究に明け暮れていた。

年がまだ若かった。格段に。

始めは天才少年や、神の申し子と。頭脳はもてはやされ、将来に期待されていた。

本人に とっては周囲の称賛など耳に入らない。少年だった彼はまだ、歪んでも いないし真っ直ぐ歩いているのかどうかもわからなかった。

『数』『数字』って何だろう？ 何のために あるんだろう？ どうして体が『情報』で出来ているんだろう……？

浮かんでは積まれ浮かんでは積まれていく疑問の数々が、山となり幼い竜代の頭の中に整理され しまわれていく。蓄積されている箱の中の領域は有限だとしても、信じられないほどの広さ だったのかもしれない。

彼は大人へと なるに つれて ひとつずつ疑問を解き明かしていこうとするだけなのだ。

先は、わからない。

しかし。彼の そんな志を、いじやう周囲が いつも同じで見えてくれるはずは なかった。

彼は数々の論文を書く。

子どもが作文を書くような感覚で、決して笑えないような論文を書く。

それは、天動説が地動説へと移り変われるくらいの衝撃的な内容だった。フィギュア・サークルの住人にとつては。

『アグマリズムと知能解との交配』『切断された電脳線と配信されるナンバー「数」について』『デバック感応システムと可能制御』……

恐らくは地球の者にとつてはなじみのない事柄だが、フィギュア・サークルの者にとつてそれらはどれも斬新で衝撃的なものだった。

比較的温和だった竜代の通う大学内に、激しく旋風が巻き起る。

竜代を見る目が変わる。

ある者は尊敬の眼差しを。ある者は狂喜の産声を。

またある者は……やっかみを。

彼を危険と見なした数は、年月とともに増えていった。

上の意見に逆らうな！

おとなしく言う事を聞いているんだ！

教授、権力者は竜代をおさえにかかると。

出る杭は打たれる。

（皆が先生の『失敗』を望んでいるんだ……）

あずさは細かくは知らなくとも、だいたいの素性を知っていた。

自信を持っている。自分が一番、竜代の近くにいて竜代の事をよく理解しているのだと。

今回の任務も、あずさは怪訝けげんに受けとめていた。

何故、地球？

何故、遠くの星？

もし相手が知能を持った『野獣』なら……こんな厄介な仕事が初

任務。

とても新人が なせる内容だっただろうか。

「先生！」

あずさはイスから飛びおりた。大げさに着地し、竜代の前で両腕をめいっぱいに広げて。

何も裏など ない、素直な笑顔を竜代にと捧げた。

「任務が成功したら、皆びつくりするかな！？」

屈託の なく明るい、竜代を信じきった顔。

竜代は微かに笑い……目を伏せた。

「成功したら……な」

閉じた目の裏の視界には、これまでに過ごした時の街並が思い浮かぶ。

フィギュア・サークル。『数』『数字』が支配する世界。星。

地球で過ごす2人には、遠くの物語の章にと置き忘れてきたい面持ちだった。

「明日の夜……実戦だ、あずさ」

竜代の指令は、マンションから見下ろせる夜景へと向けられた。

（成功させなくちゃ……）

あずさも、窓に映る自分と竜代と暗い空に向かって決意を固めた。

……

1。

『探索』

ナンバーサーチ。

2の。

『情報 開示』

ナンバー・ディスプレイ。

3だ！

『攻撃』

ラン。

いいか、『基礎』を忘れるな

竜代の“教え”の声は何度でも繰り返される。1、2の3。

それはリズムに のって。

それはリズムに のって。

難しい事ではない。リズムに のるだけだ。
バグ化された野獣は、朽ちて滅びゆく。

(何処に いるの？ …… 『野獣』！)

放課後の学校の教室で。あずさは『友達』に呼び止められた。

昨日とは柄や形の違うピンどめをしている外ハネ髪的女子と、色黒肌のロン毛的女子。今日は2人だけだった。昨日、『噂』を提供してくれたショートヘア的女子は いないらしい。

「加藤さん」

席で帰り支度をしていた あずさは「ふえ？」と間の抜けた声で返事をしてしまった。

まだ生活には慣れていないらしい。

「ななな何でしょう？」

動揺は、そのままに。しかし特に気には されなかった。

「昨日の放課後、水島先生と何を話してたの？」

いきなりの質問。あずさは ますます心臓が飛び出しそうなほど

動揺した。

「そのまま2人で帰ったって目撃の噂があるんだけど？」

核心を突く。その通りだった。

あずさと竜代は別々に地球へ赴き、別々な所に住居を構えて住む事にしている。しかし新入生と新任の教師。同じ日に2人は生活を開始した。そして。

昨夜は竜代が拠点とするマンションに訪れ、2人に課せられた『任務』について今後の策を練る手はずだったのだ。

あまり具体的な策は打てずに終わった　あずさは結局　帰ってしまっただが。

そんな事を露とも知らない女子2人は、勝手な想像を展開した。

「まさか……」

「教師と生徒の……」

次の声は合わさった。

「禁断の……」

あずさはブツ！　と吹き出し慌てた。「ち、違う！」

完璧に否定しながら心の中では　なりたいたいけど、と呟いた。

禁断の。

敢えて　その先は謎のまま。

背景　効果の薔薇が　うっとうしい。

「それは、そのう……」

あずさは必死に言い訳を考えた。本日、帰宅してから再び学校へは戻って来る事に　なっている。竜代との待ち合わせだ。

勿論、正体は明かせない。自分は野獣を倒しに来た宇宙人だとはどうか　やり過ごす方法は　ないだろうか。

あずさは開き直る。

（ええい、適当だ！）

腹を決め、手先を組みながら物凄いスマイルを作ってみせた。みせてみた。

「先生とは、　親　戚　なの！」

笑顔のままに。

「母の従兄弟の伯父の嫁の隣の太郎の息子が花子なの！　じゃ、急ぐから！」

と、あずさは言い捨てて駆け去って行った。片腕をしなやかにクネクネさせながら風に　そよぐように。

呆然とするしかない友人2人を差しおいて。友人達は繰り返す。

「母の従兄弟の伯父の嫁の隣の太郎の息子が花子……」

つまりはオカマ。適当である。

「変わった事って　あの子よねえ……転校生」

「手がスネイクに　なってたしね……変な子」

どうやら適当の　さじ加減を間違えた　あずさは、しっかりと『変人』の称号を手に入れた。

そんな訝しげな友人2人の背後から、竜代が　やって来る。

「加藤あずさは帰ったか」

ちょうど　よいタイミングで姿を見せたと　あつて、「水島先生

！」と友人達は歓喜の声をあげ盛り上がった。

「加藤さんと親戚って本当なんですか？」

「本人が　そう言ってたんですけど！」

「教えて下さい！　そうなんですか！？」　……

今や竜代は全校　女子達の関心の的でも　あつたのだ。答えないわけにもいかず。

竜代は苦笑いをしながら「まあ……そうだね」と話を合わせるしかなかった。断じてオカマではないが、親戚、という事で落ち着きそうである。

そんな大人の余裕を見せた竜代だったのだが、フ、と目の光を変えた。

「で、君らに頼みが　あるんだけど……時間、空いてるかな？」

口元は笑ったまま。しかし目は笑っていない。

これから夜が来る。

あずさが再び学校へと戻って来るはずだった。

444 「バグ化生物 誕生論 2」「盤上の駒」

将棋、囲碁、チェス、オセロ。

誰でも知っている、8または9マスボード上で競うゲームを取り上げてみた。

そういえば野球は9回 表裏、9人对9人でするスポーツだったか。まだ探せばあるかもしれない8か9を基盤とする一般ゲーム。柔軟な思考と緻密な戦略を要するボードゲーム。たかがゲームにしか過ぎない。血は流れない。ないはずだ。

そしてバグ化生物の誕生の説話は、こんな所から生まれたかもしれない。

……

まだ幼いあずさは難民キャンプ地にいた。争いの絶えない情勢の渦中にいた。

何故 争う。何故 奪う。何故は繰り返される無限のループ、反復子もしくはイテレータ。

何処の世界でも支配は されてしまうのか。

全天の星。辺りの砂漠と、遠く地平線にまで途切れなく、そして果てしなく広がる四方八方の荒野。砂漠には、街並のように通りをつくり張られている睡眠と休憩用のテント。施設と言えば洗濯場などの衛生施設、給水タンクなどの浄水施設が国によって用意は されていた。

ラテン語で“星の見える所”という意味を持ち生まれたプラネタリウム。あずさのいる場所は星の観測にはまさに打って付けの見晴らしの良すぎる環境で、邪魔するものは何もなかった。

ここでは天動説が唱えられている。自分の星がほぼ中心に空の星は動いているのだと。

この星の住人が宇宙の何処までを把握し開発に努めてきたのかはまだ幼い。あずさは知らないが、ここでは天の方が動くのだと解釈されているらしい。

地球人は自分達の星の方が動くと言動説を主流にした。天動説はもう古きものと。

星が変われば、どちらが正しいという事ではない。星はそもそも、止まる事はないのだから。

「あの目立って輝いているのは何？」

あずさは給水場で、大人と一緒に水を補給しに来ていた。大人がタンクに水を注水している間、手持ちぶさたになった。あずさの心は空へと向く。指のさす方角には。あずさの言う通り少しばかり青く見えて光り輝く一個の星が存在していた。小さいけれど、輝きが他に比べていつそう強い。

「チキユウ」

大人は答えてあげた。どうでもいいように。

「チキユウ？」

「地球よ」

タンクの水が溢れる手前で蛇口を捻り、水を止めた。

「あるのは知ってるわ。遠い星。私達と似ている人間という種族が住んでいるけれど」

もったいぶったように言い、タンクの蓋は閉められた。こぼれなように。

「けれど？」

「興味がない」

作業の手は止める事はなく。もう一つの持ってきていたタンクに今度は水を入れていく。

「何故？」

あずさは疑問を口にした。大人は、やはり答えてはあげても休ま

ない。

「私達には無いものを彼らは持っている。とても邪魔」

あずさは首を傾げる。「邪魔？ それは何？」

水は、注ぎ込まれる。

「感情」

人の場合。人の脳には本能・思考・感情と3つのセンターがあるとされている。

同じく脳には、主張・遂行・護身と。この脳内の3×3の連携、もしくは伝達の結果が人の質となり表に出されよう。

フィギュア・サークルでは、『感情』は無、それか後手にまわる。大きく強く、これまで制御されてきただけなのかもしれない。

あずさのいた難民キャンプ地は その後。予告もなく攻め込まれ、壊滅させられたという。

一掃された跡地には、外来を呼ぶためのバー、闘技場、カジノなどの娯楽場を建設するつもりである。

決定は実行。0なのか1なのか。イエスかノーか。攻めなのか受けなのか。プラスかマイナスか白なのか黒なのか。

それはダイスでも振るように決めなければいけない。出目を実行せよと無情にも。

彼らには感情がない。

彼らには感情がない。

誰かが盤上の高みから見下ろして、遊んでいる。

あずさ達という駒を……動かしている。

「……」

感情がなければ、何も感じる事はない。悲しむ必要もない。

だが。あずさは『第3の道』を知っていた。

「はあ、はあ、はあ……」

あずさは もう来た道を戻れそうにはないほどの長い道のりを、
子どもの足で疾走してきた。

「……」

荒野と砂漠を駆けて来た。捕まるのか捕まらないのか、追ってく
るのか来ないのか？

後ろには誰もいないのが幸いだった。

『第3の道』……それは、『逃げ』る事。

「チキユウ……」

上を見上げると、相変わらず天はその懐ふところに星々の所有を示してい
る。

夜空の星は、あずさに何を導こうか。

消える？ 消えない？ ……逃げる？

あずさは隙を見て走り、逃げ出す事には成功した。あずさの中に
恐らくは、通常にはないものとして捉えられていたものが存在して
いると思われる。そう。

『感情』の因子。

あずさは盤上の者に『消された』のでも『消されなかった』ので
もない。

あずさが自らの『意志』で逃げ出した事を。

逃げ出した者は、先 隠れなければならない。『決定』から外
れた者よ。

『野獣』と呼ばれて。

555【？】

神は1から9の数字を組み合わせさせて遊ぶ。並べて遊ぶ。並べて遊ぶ。

1と9。1と9と3。2と9と3。2と8と4と6。6と9と3と4と2と……。

重複してもいい。6と6と3と2。

その組み合わせは、？ 通り。

……

私立チユートリアル学院。児童の他に、障害者、高齢者の福祉・養護施設が付設されている近代的学舎である。生徒が主に利用する、専攻科目ごとにおかれた研究室などの教室が密集する校舎の中の一室で。

白衣を着た竜代は敵と対峙していた。

相手は、美術室に飾られていた絵画。原色を多用している強烈な色彩タッチのその絵は、面白い事に20世紀初頭のフォーヴィスム（野獣派）を思い起こさせている。

「姿を現せ」

竜代の低く重い声が敵を呼んだ。敵、絵画がそれと竜代は決めつけている。

『野獣』自身から特有の信号が出されている事を踏まえ足がかりにして。潜伏している場所を特定する事など、とても容易い事だったのだ。

そして竜代は一人で、敵の前へと出向き面していた。

『……』

絵画は話さない。しかし。

「このまま、お前自身のプログラムを破壊してやろうか……それもいいが、せっかくなんで正体の一つでも晒してみたらどうなんだ」
何故か敵を煽る竜代。すると敵は、空間をねじ曲げて絵画からジェル状のものとなって飛び出てきた。アクリルの絵の具が融け出してきたかに思える。ガソリンでも撒き散らしたかのような光めくグラデーシヨンの色彩をしていて、鮮やかではあるが不快な色だと人は眉をひそめるかもしれない。

「構造のプログラミング次第で、姿形は自由に変えられる。だがそれができるのは、ソースコードの一つでも理解可能な技術者だけだ」
ジェル状の敵は床の上を蠢^{もぐもぐ}いている。時々、触手を真似て手を伸ばしている……手なのかそれはと疑いたくはなるけれど。

「バグ化には関係のない事か」

苦しんでいるのか助けを求めているのか。敵は這いながら、竜代に近づこうとしているようだ。きっとそれは本能。バグ化はしたが、生きようという意志はある。

「教えてやろうか、フィギュア・サークル世界においてのプログラミング基本概念」

相手を見下すつもりはないが、そうも見えてしまう竜代の冷めた視線が敵を貫き冷凍へ固体へと凝固させてしまっそうだった。

「1、自己が何なのかを明かさねばならない『証明』。2、言われた事は必ず実行し やり遂げねばならない『義務遂行』。3、自己を守らねばならない『護身』。この3つだ。ロボット工学や家電製品の3原則と混同しないように。似てはいるが、お前はロボットでも機械でもない、基盤プログラミングから逸れた者」

わかったか？ というような顔で敵を見つめた。

「これより上の第0条があるが。 各個体の先よりも全体未来を優先せよ……『種の存続』だ。覚えとけ」

竜代は白衣のポケットから『探索爆弾^{サーチ・ボム}』を一つ取り出した。

そして、敵の頭上に放り投げる。ボン！ と教室内だけの程度に爆発音は広がった。白い煙が敵を中心に発生し、細かいゴミなどを

巻き上げる。しばらくして治まった後に姿を再び現した敵の一部分には、『5』という黄色いゴシック体の数字が浮かび出ていた。

「5リズム、か……傍観、観察者、の数字だな。なるほど、絵だからか？ 生徒を見ていて楽しめたか？」

話し返す事の不可能な相手に竜代は、一方的ともとれるような会話をしていた。ひとり言は続いていきそうだった。

もしや やつと語れる相手を見つけた喜びが口を軽くしているのだろうか。楽しみ、喜び。それは単にほぼ働かないはずの感情から来るものなのか別の本能から送られてくる言葉や行動にしかすぎないのか……不明だが、とりあえず わかっている事は。

竜代はこの部屋に来てから、一度も顔を崩してはいないという事だった。

「感情か……」

竜代は探索爆弾が入っているのとは違う、白衣の胸元についているポケットに手を当てた。少し固形に膨らんでいた。『何か』が入っているらしい。

『……』

ぐたり、と。壁に寄りかかって『立つ』フリをするジェル状の敵。赤子のような。弱々しくもあり、強くなるうという本能部分を垣間見ているようでもある。

竜代の頭の中には、別の思考が渦巻いていた。

『5』回 急所を叩けば敵は滅びる。はずなのだ。

竜代の思考は、『決定』される。

「試させてもらうか……新薬」

気にかけていた胸ポケットから、彼の言う『新薬』というものを取り出した。それは手で握れるサイズの小瓶に入った透明の液体。貼られているラベルには、“感情”を意味する言語が書かれている。「地球人にあつて俺らには欠けるもの……加えらると、どうなるか」初めて竜代は口元を歪ませる。

小瓶の蓋は捻り空けられ、中の液体は敵へと振りかけられた。『

ギシャアアアッ!」

金物でも搔いたような悲鳴をあげた。

敵は暴れ、暴れ、暴れて。触手を、体を、狂い踊らせた。シユウ
ウト、ガスが発生しゴムの臭いが屋内に充滿していく。竜代は手の
甲で鼻のあたりを庇い、目を細めた。一步、一步と後ろへ自然に足
は下がる。

何かが、敵の内部で起こっている……竜代は目が離せなかった。
好奇の心は、感情か？ 本能か？

やがて敵は、くぐもった音を発していく。『リユウ……ダイ……』
名前を呼ばれ、竜代は焦りの表情を見せた。

「何故名前を知っていた？」

疑問をそのまま口にする。『フ……ハ……ハ……』敵は笑う。

目の前の結果に、竜代は驚きを隠せない。身の危険さえ本能的に
感じていた。

『今マデ見テ来タモノヲ言葉ニシタダケダ……生徒ノ名前モ……言
エルゾ……』

最初に聞き取りにくかった発音は、徐々に流暢さを増していた。
言葉が正確に発音される。たった数分の間の事だったが、この極端
な変わりように竜代は舌打ちをせずにはいられない。

バグ化生物は進化を遂げた。進化と言いつけるのかは定かではな
い。

『知性ヲクレテ、感謝、スル』

それが合図だった。

グバツ!

自由自在に伸び縮みできる体を思う存分にと広大に。竜代をすっ
ぱり包み込もうと始め反動をつけ背を天井近くにまで高く伸び出し
てきて。竜代に襲いかかってきた。『グルル……』

敵の唸り声。竜代は抵抗できず、くるまれてしまった。

「……」

竜代は捕まる。巨大ジェリーフィッシュにでも絡められているに

似ていた。

“感情”を備えた『野獣』は、解き放たれ……た。

ひとつ。自己同一性、アイデンティティ。自分が何なのか、または何をすべきかを主張しなければならぬ 『証明』。ロボットならロボット、機械なら機械だと。表してみよ。

ふたつ。言われた事は必ず やり遂げねばならない 『義務遂行』。ロボットなら服従、機械なら操作性。命令には従え。みつ。自己を守る 耐久、『護身』。

人がいた。人の話。世界を造ろうとした、人の話だ。

人は、まず理想を掲げた。まずは起だ。世界はきつと、こうあるべきだと。完全なる世界を頭に描き、創りたいと願う。

次に人は人を助ける。理想だけを唱えていたのでは何もならない。ひとりではできない。協力しなければ。手を貸さねば。ひとりでは出来なければふたりで。ふたりなら、きつとできると。

そうして結果が出た。形となってまずできた。見て見てほら、上手くできたよ成功だ、と人は達成感に酔いしれる。

上手くいったら自信がついた。もつと見て褒めてほしい。褒めて褒めて、もつと自分を褒めて認めてほしい。自分は自分、自分しかないのだと。

さあ自分の事はもういいか。周りを見て。周りの人は、何を思っているのだろうか？ と思いにつける。

周りの人の懐ふところに飛び込んでみる。そして周りに歩調を合わせて進んでみる。世界を皆で創りたいんだと息巻いた。

何て楽しいんだろう、懐の中は。こんなにも楽しいものだったなんてと気がついた。それではこの湧き上がってくる喜びと楽しさを、どうか周りにも分け与える事ができないかと考える。分け与える。

力が みなぎり、さあ今なら。世界を、今なら大きなものができ
るだろうと確信する。やってみようとやる気を出せる。

そうしてできた世界は完全。これが世界だ。自分は強いし、何で
もわかる。だって今までに ほら。自分の中で血となり肉となり、
培ってきたものがあるのだから……と。

1から9までの性質。生きている あなたは今、どのあたりにい
るのだろうか。

理想、支援、成功、個性、観察、調和、喜び、挑戦、平和へ。見
てそしてまた理想へ。

円を描いてみてほしい。リング。永遠の象徴。生から死、死から
生へ。

円周上にとられた9つの点は、線で結ばれる。崩れる事はない、
バランスは すでにとられている。そしてその『9つの図』は名前
をつけられ、とても人の役に立とうとしていた。

本能・感情・思考。

そこに証明・遂行・護身。

これに興奮・活動力・安心を促す3つの神経伝達物質の量を調節
し加えて出たものが。

性格である。

すでに科学で証明された。

科学も人も、完全を求めて旅に出る。

水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、今は外
れて力なき冥王星。

この太陽からの9つの星を結んだ図を神は何処からか見下ろして

遊ぶ。

この調和の宇宙を。銀河を。星を。創りあげたものを。
だが輪を乱すものを、神は認めない。決して認めない。認めない。

さあ輪から外れた『野獣』よ。何処へ行く？

ある天才はその頭脳を以てして彼らの『再生』に臨んだ。夢を描
いていた。

ただ周りには、『理解』されていない。

あずさは一度 帰ってから再び学校へと戻るつもりだった。

公道を走ってきたソーラーバスから降りた あずさは、「えと……」と、次に行く道に迷う。確か電車に乗るはずだったのだが、地球に来て間もないあずさは帰りの駅への方向や道をまだ把握できていなかった。仕方がなく、近くで見つけた無料ネットカフェに入る。無料ネットカフェでは、レジにて飲食などを設定料金以上に注文さえすれば、2時間までネット利用が無料となっている、そんなシステムの店である。

あずさはオレンジ色のジュースを注文して受け取ると、店の外壁となっている窓ガラスに面したカウンター席に座って、設置されていたパソコンの電源を入れた。

ナビを開き、自分の現在位置を確認して目的地を確かめる。「ふんふん」

ついでにネット料理アニメ『クッキング・ファザー7』を観賞した後、店を出た。

駅へと向かう。触れても実体のない街路樹が間隔を空けて並んでいる人通りの多い遊歩道を歩き出していた。すると深緑公園が見えてくる。

ここには広葉樹、イチヨウなどの針葉樹、桜などの落葉樹と、本物の樹が多種に植えられており見る者を楽しませてくれる大規模な国営自然公園だった。あずさは都市にしては珍しい風景に惹かれて公園の中へとドキドキしながら飛び込んでいった。

空気も色鮮やかさも全然違う世界に、あずさは興奮して何かを叫んでみたくなる。ここ地球に来て初めての爽快感にとっても感動していた。並木道を歩いて、時々地面の上を駆けて来る足元の枯れ葉や風が気持ちよかった。

古風な男女のカップルや、犬の散歩をしている老人とすれ違い、ベンチで本を読んでいる大学生や昼寝している おじさんの横を通りすぎていった。

道をそろそろ突き当たるかと思い始めた頃。あずさの耳に、動物の鳴き声が入ってきた。

最初気のせいかと思ったが、あずさは確かめてみようと脇道に入る。大通りから外れて、小さな道を辿って行くと途中で小さな『箱』を見つけた。

繁みの横に ちょこんと置かれていた、『ERJAS』と側面に書かれている蓋付きのダンボールの箱。蓋は閉まってはおらず、覗くと一匹の白い子猫が可愛らしくあずさを見上げていた。

どうやら捨て猫らしいその所帯を、あずさは悲しく思った。

「……」

動物を飼うには申請がいる。そう あずさは知識として聞いていた。本当なら、動物を無断で捨ててしまう行為を行った者には、それなりの制裁が待っているのだが。

「ミイ」

子猫は鳴いていた。鳴かれても、とあずさは困った。立ったまま、どうしようと周囲を見渡してみる。すぐそばには弁当箱や新聞紙が捨ててある網目で大きいゴミ箱があるだけだった。

考えていたら、急に小雨がパラついてきた。本格的に降り出す前に立ち去らなければと焦りが生じる。あずさは去る事を決意し、ため息をついた。

せめて、と。あずさは箱の蓋をきちんと閉めてあげた。濡れないようにという配慮からだった。

静かに、あずさは晴れない気持ちで場から去る。雨は強さを増し、てきていた。

磁気浮上式リニアモーターカーに乗り都心から離れて数十キロ。地下マンションにあずさは拠点を置いて住んでいる。地下には地下

で、交通・業務・供給・防災などの民間施設や廃棄物処理・研究・軍事などの国営施設が都市を中心に建設管理されている。

大深度法は より複雑に細かく定められ、やがてはマンションや場所によってはテーマパークも造られるようになっていた。今度ウツソジャパンというレジャー施設では科学推進派による『シュレディンガー音頭祭』が開かれる予定である。

あずさは指紋・声紋・視紋・鼻紋・口紋・耳紋その他 秘密の紋の照合を瞬時にされてマンションの玄関から入り部屋へ帰ると、ぐったりとして多人数掛けのソファに寝そべった。まだ慣れない生活には、どうしても疲れがつきまとう。

部屋に入った途端に自動で点いた照明器具、同じく自動で映りだされたインターネットテレビ。照明は天井全体が太陽光発電によって調節された明るさで照らされており、テレビは立体映像となつて専門チャンネルが自由に選べる。昔にデジタル放送統一化された後にインターネットは世界基準レベルですでに法制化されていた。

地下なので日光は届かず、窓が空気清浄型なものには土埃などが入りこまないようにするためである。

「お腹すいたなあ……」

一人暮らしのあずさには、ご飯を作ってくれる人はいない。いるわけがない。

自分で作ってもいいのだが、疲れて面倒だったあずさはテレビを見て「これにしよう」と呟く。

ちょうどテレビではCMを放送していた。

10分後。ピンポン、と。玄関から元気のいい声が聞こえた。

「ちわー。『オンタツキー・フライ・ドキッチン』でーす」

軽いノリでの挨拶だった。

「どうもー。支払いはどうでしたっけ？」

「あ、スカイレインボーカード払いですよー、って常識でしょ知らないの 안타」

と、お互いの会話は玄関のインターホン越しでなされていた。直接に会う事はなく、玄関に設置されたシューズボックスに入れられて商品は部屋の中へと滑り流れるように運ばれてくる事になっている。勿論、運ばれてくる途中で危険物ではないかと識別されて。

「あいにく、世間知らずなんです。ごめんなさい」

あずさは ごまかそうと謝った。見えないが口が どうやら悪そうなおんタッキーのお兄さんは、ついでのように教えてあげた。

「月末に請求来ますんでねー。それまでにしっかりと銀行に預金しといて下さいねー。3ヶ月滞納すると死刑になりますんで。赤字の警告封書が来ないようにお気をつけてー」

カードに描かれた空に架かる7色の橋は、交通費・食費・光熱費・ガス代・電気代・治療費・通信費を表しているらしい。それぞれはこのカードで支払われる。

「じゃ、また。毎度ー」

用が済んでお兄さんは足早に立ち去って行った。

あずさは丸型シーフードピザを8分の1ずつに切り分けて食べながら、テレビドラマを観ていた。生き別れた片親と再会する、兄弟達の感動的なドラマだった。中学生の頃に別れを宣言され路頭に迷った兄弟達が数々の苦難を乗り越える。公園に作り住んでいた段ボールの家はその努力のかいあってか発展して3階建てになった。親も見つかり、兄弟達は幸せへの階段へと上っていくのである。

あずさの脳裏に、帰ってくるまでに出会った、箱の子猫の姿が浮かんだ。雨は地上に降り続けているのだろうか。お腹をすかせているのだろうか。鳴いているのだろうか。それとも……と。

ぼうつと、痺れた感覚の疲れた頭の中で。あずさは思った事を口にしてみて……ドサリと横になった。

「感情って、何……？」

……答えなど期待せず、まだテーブルの上に残っている冷めかけのピザを見つめて。

ソファのふかふかな柔らかい感触に心地よさを感じながら、あずさはひとりゆっくりと目を閉じて……眠る。

テレビでは最後に登場人物達が楽しく幸せのメロディを歌って……いた。

……

あずさは目を覚ました後に慌てて飛び起きて、学校に向かう事になる。

とても途中で子猫の様子など見に行く余裕はなく、学校へと直行して行く羽目になった。

だが、それでよかったのかもしれない。何故ならばだ。

雨に濡れて色を濃く変えた、蓋をされて中には子猫が入っているはずの箱。

箱は原形を変えず、移動もせずに そのままだった。しかし。

地面の小さな窪みに流れ注がれていく赤い液体。一本の細い道を作るように、雨にも流され流されていく赤い色。

箱から、溶け出すように。

雨は、降り続けている。

あずさは時間を気にしながら、何とか待ち合わせ時刻ギリギリに学校へと戻って来た。

断熱材としても使用されている、エコにも優しい天然繊維の羊毛を下地に織られた、生成色の上下の合わせを着ていた。上下どちらにもポケットが幾つか付いており、『探索爆弾^{サーチ・ボム}』などの様々なアイテムが収納されていて、手荷物は特に何も持つてはいなかった。

走る足は休む事はなく、竜代と待ち合わせている理科室へと向かっていた。明かりの点いている校内は中夜に近しとも言えどもまだ電気などの供給を自動ストップさせてはいないらしい。おかげであずさは迷う事はなく、昼間に記憶していた通りのルートで目的地へ辿り着く事ができたのだった。

あずさは理科室へ入る。しかし絶対に先にいると思い込んでいた竜代の姿は何処にも見当たらなかった。

「あれえ……？」
と、寝ぼけたような声を出す。狐にもつままれたような顔をしている。「おかしいなあ」

竜代は時間に正確なはずだった。あずさは首を傾げる。そして「ああ！　そうか！」と頭を抱えてパニックになった。

「もしかして場所を間違えたのかも！」
自分でも充分に有り得ると思っってしまった。うおおおくと叫び声を上げる。すると。

「合ってるよ」
と、あずさの背後から声が聞こえた。

「……」
「じ苦労さん」

振り返ると、腕を組み入り口付近に体をもたれかけてあずさを見

ている竜代がいた。

「せ、先生！ なあんだ、いたんじゃないですかあ」

びっくりして竜代の前まで近寄った。あははと少し誤魔化し笑いをしながら竜代の顔を見上げている。竜代は何かを考えながらブツブツとひとり言を言い出した。

「搜していたんだが……」「？」

「考え方を変えてみようと思う」

意味がわからない事を言い出した。あずさの頭上にクエスチョン・マークが浮かぶ。

「どういう事でしょう？ 先生」

と、聞かずにはいられずに聞いてみたあずさ。「例えば」

チラ、と竜代があずさを見る。視線、表情それはとても意味深な仕草だった。片腕の上にのせ立てたもう片腕の先の人差し指を。当てていた口元から離して、ゆっくりと、その指は。

……あずさの、口元に。

（へ？）

手は広げてあずさの首筋にかかり、頬に。

（はい？）

やがて竜代の両手が、あずさの顔を包み込むように、優しく……自分の顔へと近づけていった。

いくら鈍いあずさといえども、これにはたまらず。最速で顔が真っ赤になった。だがしかしあずさは拒否ができない。「……！」

そのまま竜代の瞳の中へと吸い込まれていった。しかし。

「い、い、加、減、に、しやがれいっ！」

バコチーンッ！

鈍く嫌な音がした。頭蓋骨でも真正面からぶつかり合ったような

音。

その通り。頭と頭がぶつかったのである。

バタリ。相手……あずさに近づいて迫っていた竜代は、思いがけない頭突き of 攻撃にあつて廊下の窓際に打ちつけられるほど飛んでいった。額からは煙が細く上がっている。

「……」

あずさはクタリと腰を床に落とし、正面で倒れている竜代を見た。自分は何もしていない。一体何が起こったのだろつ、と。目が点になり始め何も理解ができなかった。

「あーくそ。敵の策にはまっちまった。厄介な敵だな、どーしてくれよう」

あずさの頭上で声がした。

聞き覚えのある声。聞き間違えるはずのない声だった。

あずさは、眼球だけを動かして真上を見てみた。すると。

「せ……？」

名前を呼ぶのに躊躇^{ためら}った。無理もない。

その姿は人の形ではなかった。何と、餅が伸びたか、もしくは魂となつて頭から抜け出したかのような姿形をしていた……竜代。天井近くまで伸びていた餅が魂の先に丸い、幼児にも見える竜代の可愛い頭がついていた。ミニサイズ竜代、略してミニ竜代としておう。

どうやらミニ竜代の尻尾(?)の先は、あずさの前髪に繋がっているようだった。

「せ、先生。何故……」

まだ半信半疑で頭上を見上げていた。受け入れるのに非常に時間がかかるらしい。

「何故……私の前髪に……」

やっと疑問が言えたと思っていたら、今度は前方。上半身だけを起こしてあずさ達を見ている、人の形をした方の竜代から声が返ってきた。

「そこにいたのか水島竜代。校内中を捜しても見つからないはずだな」

そう目の前の竜代は言った。

(????)

さっぱり経緯いきさつがわかっていないあずさを置いて、竜代対ミニ竜代の会話は続く。

「捕まえたと思ったらアッサリと抜け出して。ずっと教え子の近くで俺を見張ってたのか」

人型の竜代が言う。これまでの会話の内容から察するに、どうやら本物はミニ竜代の方である事が判明した。あずさは頭の中を整理する。「捕まった……？ 先生が？」

全く知らない。恐らく『敵』である人型の言う事に少しショックを受けるあずさ。

要するに自分の知らない所で、本物の竜代は敵と一度対面し。竜代は敵に捕まって、だが抜け出して。そしていつの間にか自分の所に。

そういう事だった。

丸い顔のミニ竜代は、激しく敵を睨んでいる。

「……そうだ。お前が俺の姿で堂々としてるもんでしばらく様子を見ようと思ってな……知性のあるバグ化生物なだけに厄介な奴だ。一体何を企んでいる!？」

真に迫って聞いた。敵は答えた。

「別に。面白かったんで」

涼しく余裕だった。

「おい！」

ミニ竜代は吐き気を催した。

「先生……」

あずさの冷や汗が止まらない。

そんな茶番が繰り広げられている合間に、敵は静かに変化しつつあった。まずは長い髪。風もないのにザワザワとなびき出していた。

「……悪いのはそっちだぜ、水島竜代」

敵の黒い瞳の奥に光るものがあつた。涙ではない、それは。
「最初に俺と戦った時に」

思い出されるは竜代が敵にぶつけた瓶の中の液体。

“感情”を意味する言語のラベルが貼られていた、瓶の中身。

「俺に、変な薬品をぶつけやがつた。そのせいで俺は」

何か全く違うものへと、『生まれ』変わってしまったのだろうか。
だとしたらそれは、敵にとっては幸なのか不幸なのか。わからない。
「悪いな……」

ミニ竜代の表情は影を落とした。冷やかに相手を見据えるしかなかった。

敵は、内部から風を起こして立ち上がり、変貌していく。

シュワア……

炭酸が湧き出たような音とともに髪を含む体毛という体毛が全て立ち上がり、敵の竜代の顔は人でも何でもなくなっていた。もはや衣服を着た中身は、化け物そのもの。深い皺が刻まれた皮膚は今にもそこから血が出そうで気持ちが悪かった。

えくぼを作って笑っている。

愉快で面白そうに、笑っている。

「バグった奴を元の形に戻す試薬だったんだが……どうやら上手くいかなかったみたいだな」

ミニ竜代は目を閉じた。

「16ME4U110-910-9xx……」

アルゴリズムを唱える。すると額から眩い光が輝き始めて、ミニ竜代はその姿形をみるみるうちに変えていった。変えて、というより戻った、という方が正しいのだろう。あずさの前髪と繋がっていたものは断ち切られ、元の人の形である竜代になった。

「先……」

「悪いなあずさ。先走って……お前を信用してなかったわけじゃないんだ」

あずさの隣に並ぶ。あずさの方を見ようとはせず、目の前の敵だけを難しい形相で見ている。簡単にこれまでの事情を説明する。

「先に下調べしてた最中に奴とバツリ遭遇して、まんまとしてやられた。ここからは第2 Rとなる。^{ラウンド}基礎はOKだな？」

ざっと急ぎ足で話し終えて、あずさに同意を求めた。あずさは…

…。

「……」

少し考えて間が空いた。だが。

「はい！」

快く返事をした。

あずさは、敵と竜代の間になんかあったのかを全く知らない。しかしあずさは竜代を疑ったりなど微塵にも思わなかった。

心の底から竜代の言葉を信じている。それだけだった。

あずさと竜代は戦闘態勢に入った。廊下に出て、間合いを数メートルとった。敵は粗悪に形成された細胞の体で、骨ばった指からは黒く変色した、鋭く細長い爪が生えている。大きい口はこめかみにまで裂けて、耳は尖り、歯は黄色。臓器から湯気が立っているようにも見える。

本人は、何にも動じてはいない。なるようになればと、堂々としていた。

何処からかメキメキと木が裂け割れたに近い音が聞こえている。

「いいなあずさ……細かく指示を出す暇はない」

あずさの隣でボソボソと竜代は話す。あずさはしっかりと聞いている。

竜代は続けた。

「お互いがお互いのサポートを……しろ」

あずさはコクン、と頷いた。息を呑む。

「最初は奴の急所探した。『^{サーチ・ボム}探索爆弾』は、幾つ持っている？」

竜代の問いかけには正確に。「6個です」

焦りと緊張に押されながら。敵からは2人とも目を離さずに。

「『オ・バード』作戦だ、行くぞ!」

それが合図。

あずさの足は地面を蹴った。「はい!」

敵に目掛けてまっしぐら。あずさのスタートダッシュを受け止めようと、敵は待ち構えていた。しかし。

ピヨイ。

あずさの体は転回するように、宙に浮く。手を何処にもつかずに体の軸を使つて後方2回宙返り1回ひねり(月面宙返り「ムーンサルト」)とまではいかないが、匹敵するほどの鮮やかさで高く敵の頭上を越えてジャンプした。

「!?!」

敵の視界からすれば、突然あずさは消えたように見える。

あずさは消えたが、代わりに視界の中に映ったものは。

『探索爆弾』^{サーチ・ボム}を右手で包みかけて持ち、相手に手の平は広げている

ように構えてそれで左手で右腕を支えている態勢をとった、竜代だった。

「『探索……爆破』!」
クラッシャー

ドオンッ! 従来の使い方とは異なった『探索爆弾』^{サーチ・ボム}は、竜代ならではのプログラミング・アレンジで、結果。遠距離から猛威となつて拡散エネルギーが放たれた。オオオ……。残響がおとなしくなっていく。

直撃は避けられなかった。猛威、とは言ったが破壊力の大まかを敵の体で受けており、周囲の破壊規模は比べて小さく。壁や器物などはあまり損壊されてはいなかった。

敵はかなりのスピードで吹っ飛んでいった。

一方、先に着地していたあずさ。少し離れた地点に敵は飛んで落ちてきて、廊下の硬い地面に沈む。「……さすが……」

タラリ、と汗が出るあずさ。竜巻アタックなバレーボールでも受

けたように凹んでいる敵の腹。そのダメージはやはり見た目通りに攻撃が強力だったせいか、敵は全然動かなかった。

「さすが先生……『オ・バード（おとり）』作戦、成功……」

そんな事を言ってみる。「はは……」

（怖いよおお……先生の『探索爆弾^{サーチ・ボム}」、強化版！）

改めて師匠の恐ろしさを知る。しかしそんな悠長な態度でいる場合ではなかった。

「あずさ、攻撃だ！ 叩け！」

「え！？」

竜代の叫びがやって来る。あずさは四つん這いになったまま慌てて敵を見た。

敵 野獣の仰向けになった体。額に、くつきりと『5』の数字が表れている。

（いけない！）

「はい！」

5回、急所^{そこ}を叩け。

あずさはスウ、と呼吸をして落ち着けた後。片コブシを額に叩きにかかる。

それはリズムにのって。のって。……のって。

1回。ボグッ。1。

1回。ボグッ。2。

1回。ボグッ。3。

1回。ボグッ。4。

1……。

「！」

あずさの振り下ろした手を受け止められる。最後の攻撃は防がれた。「！」

受け止めた、骨に薄皮がくっついていてだけの屍のような手の向

こう。敵の顔が……ニヤリと笑う。

最後の一撃を食い止められてしまったあずさは、焦燥にかられた。

(しまっ……)

クロスになった両者の腕は、ジツとしたまま動かない。「……！」

「あずさ！」

竜代も不味い顔をして今にも飛び出そうと、一步片足を後ろへと下げた。しかし意外な事に敵、野獣は特に何かをする気配はなかった。

「抵抗しねえよ。……ひとつかふたつ、言わせてくれ」

野獣は腕を静かに下ろし、暗く冷たい廊下へと仰向けに寝そべったまま。まずは竜代にと話を始めていった……。

「あんたの研究資料を読んだんだが……なかなか興味深かった」

竜代へと化けた野獣は竜代を捜す。あずさにも、授業をしていた教室やマンションの自室で会っている。竜代の居場所を見つけるため、残されたものには徹底的に目を通していたのだった。

「『バグ化生物の再生』か。上手くいけば越したこたあねえよ」

嘆きのようにも聞こえる。

「どうも」

話を聞きながら、あずさのそばへと来た竜代は素っ気なく返すだけだった。野獣はフ、と軽く笑う。

「俺も思う……バグ化の原因は、新因子である“感情”だと。あんたはすでに突きとめていた。突きとめていたんだな……」

力なく寂しそうに笑った後は、目を細めていく。皺くちなな皮膚は、憐れにも思えてきていた……見守るあずさには。「……」

「妨害する奴らの方が多い。よって研究は容易に進まない上に、実現なんて雲の裏側だな」

そう言った竜代も何が楽しいのか、微笑み程度に笑っている。

諦め、でも続行、見えぬものを追う、それが夢……地上からでは見えない雲の向こう。竜代の心中を駆け巡る。

「お前が投げつけてきてくれた液体のおかげで俺は、この世界を僅かにでも味わう事ができた。感謝する……変だな。おかしすぎる。

感謝、なんてなあ。……それと」

ギョロ、と湿った眼球を横へと運ばせ、あずさの方を見た。とても喜ばしく。

「覚えてるか。……嬢ちゃん、あんたが成功したら、と化けた俺に笑いかけた時だ。俺はあんたらを心底応援したくなったもんで……だからよ。頑張れよな、2人とも……」

聞いたあずさの声は次に小さく。吐き出される。

「バグ化は あなたのせいじゃない……」

その声は震えていた。喉の奥に^{つか}痞えて出た音は、上手に発せられなかった。

その理由は。

「涙、か。嬢ちゃん、あんたも体の中に新因子がプログラミングされてんのかい？ ハッハッ、これからが楽しみだ」

小動物くらいなら丸呑み可能なのではというくらいの大口で、野獣は声を立てて笑う。

本当に面白そうに、自分の身を笑う。いつまでも。

「ふはははは……そうだそうだ。人質なんざとったって、無情なフイギユア・サークルの奴らには関係ねえかと思ってたんだがな。まあいい。どっちみち、どうこうするつもりもない人間達だった。隣の教室に眠らせて監禁してあるから、後で助けてやれよ」

最後に。

「さあ、とどめをさしな。人じえねえけど……バグ化人生、おさらばだ」

とどめなどさせるわけがない。

あずさは、そう思った。

「あなたのせいじゃ、ない……！」

ならば、どうしろと？ 何処からか問いかけは聞こえてくる。

「あずさ、……どけ」

竜代はあずさを横へと押しやった。そして。

「1、2、3、4、……5」^{ラシ}

5回、野獣の額を叩き義務は実行された。ドン、という弾む音の後に野獣はシュウウ……と。ドライアイスが気化したに似て、白煙を発生させながら徐々にそれは下火になって消えていった……。

沈黙が、痛く2人を襲いしばらく続いてしまっている。

仕方なく、竜代が空気を相手にするように話し始めた。

「俺が今している研究は、これからのフィギュア・サークルにとっては必要なものと思われる。だが、局長達お偉方その他大勢は、決して首を縦には振らない。頑としてな……いつもそうだな。新しい発想や返ってきた原点は、いつも受け入れられない」

自分の事を珍しく語り出した竜代だったわけで、あずさは堪えられない涙を何度も何度も拭きながら。黙って話を聞いていた。

「でもだな……いつかだ。いつかの未来にきつと、目に見える現実……それは『証明』となって、現れて。もしくは、表れて。くれると願う」

竜代は空を見上げて。壁ではない、何処かを眺めている。

「『バグ化された生物が原点へ再生』……俺はそう、信じている」
堰^{せき}を切った。

「せんせい……！」

気がつけば、あずさは竜代にしがみついていた。涙は止まらず、何もかもが怒りで行き場がなかった。

運命なのか偶然なのか。翻弄されたバグ化生物達を、ただの『野獣』と斬り捨てるのか。お終いか。お払いか。それらを決めるのは誰なのか。

誰が、彼らのプログラムを修正してくれる。

（これから……）

あずさは何を決定する。

（私達はこれから同様の任務を一体、幾つこなしていくのだろうか……）

全ての答えは恐らく、ない。

数日が経った。

あずさも竜代も、地球に居続けている。バグ化生物の処理は済み、報告も済んであずさはフィギュア・サークルからの連絡を待つ日々を送っていた。

「じゃあ」

「ん？」

あずさは、足元へやって来た子猫を踏みそうになりながら、食べかけの食パンを全部口の中に放り込んだ。

「さっきミルクあげたでしょー」

ここはあずさが住むマンション地下の自室。これから支度をして学校に登校する所だった。

あずさに非常になついている白い子猫は、公園であずさが気にかけていた猫。後日に様子を見に行ったあずさは驚いた。

箱は赤い液体まみれで、急いで箱を開けてみたらだ。

子猫は元気にあずさを見上げていた。白い体毛を赤に濡らせていて。これはどうした事かと考えてみるとだ。

そばに赤い飲料のペットボトルが転がっていた。中身はすでに空だった。子猫はお腹がすいたので、これを舐めて過ごしてきたに違いない。

「……あつきたあ」

あずさは笑う。子猫は、自力で生きようとしたのだ。「ミィ」

どうって事でもない顔をするのを見て、あずさは子猫を抱え上げる。

「行こつか猫ちゃん。私がちゃんと許可もらって、おうちで飼えるようにしてみるね」

見てくれの悪い子猫は目を小さくしてあずさの前であくびをした。
「にいやあ〜」

よく鳴いている。

あずさは、転がっていたペットボトルを拾い上げて網のゴミ箱にちゃんと入れて捨てた。ゴミはゴミ箱に。それだけの事。

子猫はあずさの所で難なく飼われる事になった。

「さつと。行ってくるね。子猫ちゃん」「にやあ」

あずさは鞆を持って玄関から外へと出て駆け出していった。

上層からの連絡が来ない。毎日进行すうちに、あずさも段々と心配になってきていた。すっかり地球に馴染んできたらしい体は伸びて、教室の机の上に突っ伏して竜代の授業を受けていた。突如、竜代があずさを指名する。

「加藤！ 問2！ 加藤あずさ！」

だれて話を中途半端にしか聞いていなかったあずさは慌てて飛び起きあがって起立する。「はい！」

しかし問2は教壇のボードを見てもわからない。

「ええーっと……x〃5……？」

「放課後、職員室に来るように」

竜代の刃物のような鋭い返し。あずさの背中が凍りついた。

（ひえええええ……）

お叱りの宣告を受けたようで、青白いあずさの顔にタテ線が幾十にも仲良く並んで入っていた。以前、授業中同じように設問の解答を間違えてしまっていたあずさ。実はあの時、教壇に立っていたのは竜代に化けた敵だった。堂々と恥をさらしてしまった事になる。

その事も思い出しながら。あずさが机の上で重力に逆らえず沈んでいるうちに、授業の終了を知らせる電子音が校内中に鳴り響いた。

ポリエチレンポリプロピレンポリアセチレン。本日最後の授業が
終わる。

「加藤さん！」

放課後。あずさは鞆の中へパソコンを入れて帰る準備をしている
と、後ろから声をかけられた。髪が外ハネの女子。四葉のピンどめ
を今日は2本つけている。

「え？」

キョトンとしてあずさの手が止まった。外ハネの女子は元気には
しゃいでいる。

「これから職員室に行くんでしょ？ その後一緒にどっかに寄り道
して行こーよ。終わるまで待ってるしさ！」
と、誘われたあずさだった。

意外な事を言われて、あずさの顔はますますキョトンとしてしま
い返事が遅れてしまった。

「う、うん！」

やっと出た声を満足そうに聞いて、外ハネの女子はニコニコした
顔で手を振って廊下へと向かい出して去っていった。「じゃー、待
ってるしね！」

鞆を持ってあずさも廊下へと向かう。

とても照れながら。

（初めての地球、初めての学生、集団生活、初めての……友達）

思った途端いきなり、サツ……と。あたたかくもない木枯らしが
心にまで侵入して吹いてきた……。

（でも……もう……）

職員室へ。伝っていく廊下やすれ違う生徒や教師。目的の場所へ
と近づいていくうちに、あずさに、所詮は想像でしかない喪失感が
つきまとっていく。

（もう……皆とはお別れなんだろうな。任務も終わったんだしさ……
…）

これからあずさ達はフィギュア・サークルに帰る。せつかく馴染んだ居場所を捨てて。それがあずさには言葉にはならないほど寂しく、例えばうがえないほど苦しかったのだった。

気持ちまで下にかかる重力に沈んだまま、職員室にいる竜代の元へ。

しかし竜代が、それら全てのありとあらゆる憂鬱^{もつ}を一掃して、思い切り吹き飛ばしてくれたのだった。

「任務続行だ、あずさ」

あずさは竜代が座る傍らで、目を真ん丸にして「え!？」と驚いた声を上げた。

「『地球におけるバグ化生物の排除』 上部からはそう通達がきた。俺達は今後、延長してこの生活を続けていく。フィギュア・サークルでこちらのバグ化生物ポイントがわかり次第、こっちに知らせてくれるそうだ。俺達はそれを受けて、奴らを排除していく」

竜代はデスクに手について立ち上がった後、あずさの横を通り抜けた。片手には書類の束、もう片手は遊びながら振り回して握り空気を持つ。

「体のいい厄介^{てい}払いかもしれないが、ちょうどいい。自分の研究ができるし。気ままに過ごせるし……ふう」

肩を回した方の手は、やがて凝りもとれて軽くなっていた。あずさは竜代を見ながら、怒られなくてよかったと胸を撫で下ろしていた。

束の間、竜代は静かになってぼうつとしていたが、あずさの方に振り向いて悪戯^{いたずら}でも思いついたような顔をした。そして得意気に言い放つ。

「……一泡吹かせるぞ」

あずさの表情がパツと明るく花開く。さらに竜代は付け加えて言った。

「あんの頑固ジジイどもをな！」

目は、生き生きと輝いていた。

「はい！ 先生！」

楽しそうに。嬉しそうに。

それが夢だ。

皆に行動を起こさせる。

……

時はいつかの未来。

そして何処かにある、根源が数字の場所『フィギュア・サークル』

。

物は全てプログラムで出来ており、一度バグると元には戻れない。

『決定』から逸れた者よ、逃げた者よ。捨てられた者よ。ここは。

バグる事など許されない世界だ。

一人の天才は、バグ化からの原点への再生を、夢、見ていた。夢のリングを描いていた。

されど。

彼を理解できる者はいなかった。

だからだ、神よ。願わくはただひとりでも、彼を理解できる者の存在を認めてほしい。

たったひとりでいい。ひとりでも。

……ひとり。

未来に光さす者の存在を 手に入れる。

『感情』は新因子ではない、きつとある。誰にでもある。論より証拠と、目に見える。

さあ、見てほしい。天才の描くリングを。恐らくそれは皆既日食で輝くコロナのようだ。ぜひ見せてほしいと。願う。天才達の未来に。

《END》

光あれ。

999 「行く末」(後書き)

ご読了、ありがとうございました。

思う所いろいろなのですが、楽しめて頂けるだけで満足です。
さてと、おしゃべりはここまでで後はブログで。

企画の皆さん、御疲れ様でした。 あゆみかんより

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9816e/>

さんすうリズム

2010年10月8日15時32分発行